

●モノグラフ小学生ナウ



子どもと給食

Vol.2-2

1982.教育図書出版(株)福武書店 教育研究所・調査室/加藤智穂・賀川雅子
東大阪市立礼智街小学校教諭 東 訓正・奈良教育大学教授 深谷昌志



目次

特

集

給食から食事への転換を	2
★曲り角に立つ給食のあり方	3
★欧米の給食事情	4
★文化としての食事	6

子どもと給食
提言と要約

1. 子どもたちは給食をどう評価しているか

●食欲のない子どもたち	10
●給食はおいしいか	13

2. 給食の雰囲気

●給食の楽しさ	17
●教師の役割	20

3. まとめにかえて

●米飯給食への評価	22
●給食を楽しみにしている子どもたち	23

資料1・調査票見本

資料2・学年・性別集計表

サンプル数 (人)

学年 \ 性	男子	女子	計
4年	410	349	759
5年	370	338	708
6年	360	346	712
計	1,140	1,033	2,179

調査概要

対象●大阪府・奈良県・東京都の小学4・5・6年生 計2,179名
時期●昭和56年11月
方法●学校通しによる質問紙調査

ーム
す。
て、

特集 給食から食事への転換を



曲り角に立つ給食のあり方

学校給食というと、ララ物資やユニセフ給食と結びついて、六三制やPTAと同じように、第二次世界大戦後の産物であるかのように思いがちになる。しかし、経済的に貧しい家庭の子どもに昼食を提供する試みは、すでに、明治中期頃から行われたとの記録が残されている。その後昭和7年、国が財政補助に踏み切ったことから、全国規模での展開がみられ、敗戦直前まで続いている。

そうしたルーツ探しはともあれ、なんといっても感激的だったのは、第二次世界大戦直後の食糧不足の時に提供された給食であろう。食事らしい食事は給食の時だけ、給食のお蔭で生きのびることができた思い出を持つ人たちも少なくない。

しかし、それから、30年を経て、給食の意味は大きく変わった。栄養失調は、もはや死語となり、子どもたちの肥満が問題になる昨今である。加えて、テレビや雑誌などを通して、栄養についての情報が伝達されるから、かつてのように親たちの無知から栄養の偏る事態は避けられるようになった。さらに言えば、ただでさえ、仕事の多い学



校で、なんのために給食指導をする必要があるのか。そうした仕事は、本来、学校教育の担うべき問題ではないのかという疑問も生まれてくる。

そうした気運を背景として、折りあるごとに、給食不要論が台頭する。中でも、家庭のしつけを見直し、母と子との連帯意識を強める意味で、お弁当礼讃の声も聞こえる。

さらに、センター方式の給食を採用しているところでは、栄養のバランスはとれているかもしれないが、味が画一的で、変化に乏しい。また、プラスチックの皿におかずをぐたぐたと盛りつけ、フォークを使って食べる食事は、食事の持っている文化性に欠け、えさという印象を受けるなどの批判も強い。

そうは言うものの、現在では、給食は、学校生活の中に定着しており、特に、働きにでる母親の多くなった現在、給食に助けられている家庭も少なくないと考えられる。

このようにみえてくると、学校給食は、まさに、曲り角に立っている印象を受ける。



欧米の給食事情

昨年冬、アメリカを訪ねた時、ワシントン州やカリフォルニア州で、給食室を見たり、試食したりする機会があった。

ワシントン州といっても、実際に見学させてもらったのは、タコマやオリンピアなどの西海岸に沿った町の学校だが、給食のしくみは、おおよそ、以下の通りであった。

まず、地元の新聞に、次の月の給食献立表が発表される。それを参考にしながら、家庭の事情にあわせて、食事のクーポン券を予約する。1食の値段は、インフレのあおりを受けて値上りしたとかで、1ドル25セントだった。もちろん、経済的に苦しい家庭の場合、50セントにする措置もとられていた。

朝、授業の始まる前に、教師が給食を必要とする子どもの数を調べる。そのさい、クーポンでなく、現金で代金を払ってもよい。学校ごとに集計が終わると、朝の内に、センターに、その日の給食数が伝えられ、

11時過ぎに、ランチが届けられる段取りとなる。

食堂は、教室とは別の建物にあり、食事の時間になると、給食の子どもは手ぶらのまま、その他の子どもは家庭から持たされた紙包みを持って、先生に引率されて、食堂に向かう。

どういうわけか、カリフォルニアでも、ほぼ同じ仕組みで、食堂まで、教師が引率する形がとられていた。

食堂には給食専門の職員がいて、一列に並んだ子どもたちの皿に、おかずをもりつけていた。たまたま、見学した日の献立は、フライド・チキンと（日本流に言えば）野菜のごった煮、アップル・ソースと牛乳、翌日は、ハンバーグに、生のニンジン、プリンと牛乳……である。

いかにもアメリカらしく、スイート（甘いもの）付きなのが目新しかったが、味そのものは、ボリューム満点のわりに、いま

ひと
方
方
り、
リン
な
い
か
な
ま
て
の
お
そ
ど
を
合
わ
せ
て
ア
根
の
含
め
て
い
子
と
た。
は
た
に
着
れ
を

ひとつの印象を受けた。それでも、給食の方が、家庭から弁当を持ってきた子どもより、リッチな感じがする。サンドイッチにリンゴ、あるいは、ハンバーガーにチーズなど、素朴な弁当を持っている子どもが多いからである。

なお、教師たちは、子どもを食堂の入口までつれていくだけで、その後、先生たちの控え室に集まり、コーヒーを飲みながら、それぞれ、スナックやオープン・サンドなどをつまんでいた。この時間に、進路の打ち合わせや行事の企画などをする機会が多いという。

アメリカの給食を特色づけるものは、選択の原理であろう。給食をとるとらないも含めて、親たちの意向が最大限に尊重されているからである。それと同時に、食事を子どもたちだけで食べているのも興味深かった。賄いのおばさんがいるせいか、笑い声はたててはいたが、子どもたちは、予想外に静かに食事を食べ、その後三三五五、群れをなして、運動場へ走りさっていった。



稲葉忠彦氏の『アメリカ教育通信』や白井厚、堯子氏の『アメリカ、教育、女性、歴史』などを読むと、前者はオハイオ州オバリン、後者がバージニア州シャーロットビルと、滞在した先は、ワシントン州とはるかに離れているが、それぞれの仕方で、選択の原理が貫かれているのがわかる。

テレビマン・ユニオンの『学校は生きていた』の中に、パリ郊外の小学校で見た給食の話が紹介されている。ナイフとフォークのセットされたレストラン風の食堂で、オードブルからデザートまでついたフルコースを1時間近くかけて食べるのが昼食だという。

一昨年、パリを訪れた時、教育関係者と話し合う機会があった。それによると、給食は主として、働く母親を助ける目的で始まった制度で、現在でもかなりの子どもたちは、家庭に戻って昼食をとっており、そのため、子どもたちの食事は、1.一時帰宅して昼食をとる子ども、2.弁当を持ってくる子ども、3.給食を食べる子どもに分かれる。さらに、給食も、人種により食事文化に違いがあるので、何種類かを用意しているとのことであった。

また、北詰由貴子さんの『教育ママ落第』

によると、イギリスでは、給食はステイト・ディナーと呼ばれ、野菜と肉または魚が一皿、もう一皿がプディングだという。もっとも、イギリスでも、授業は午前9時15分から12時15分、午後は1時45分から4時までで、昼間の1時間半は、子どもが家へ戻

って昼飯を食べる時間にあてられている。したがって、子どもは、家へ戻る子どもと学校で食事をする子どもに分かれる。また、ユダヤ系の子どもたちが、別の箇所に集まり、民族的な食事を食べている光景も見られるという。

文化としての食事

今まで駆け足の形で、欧米の給食事情を概観してきた。こうした欧米の状況を、日本と対比させると、基本的ないくつかの面で、大きな違いがあるのに気づく。

1. 給食制度そのものが、母が働いているなどの事情から、家へ帰っても、昼食を食べられない子どものために、社会福祉的な意味を持って始められた。そうした伝統を受け、現在でも、給食をとるとらないは、親の選択にゆだねられている。

2. 給食は、学校の中で提供されているが教育の対象外におかれ、教師の指導は行われていない。

3. そうはいうものの、食堂があり、内容も豊富で、それなりの食事文化を伝えているなどである。

端的にいうと、学校という場所で提供される「食事」であり、そこには、給食に固有の貧しさ、あるいは、暗い響きはない。

昔から、食事をともにとることは、未知の人と親しむための大事な手段と言われてきた。日本でも、冠婚葬祭の際の料理が地域ごとにより、その地方独特の味を形作ってきたのは、周知の事実であろう。もともと、食事のあり方は、その国の文化を示すバロメーターだと言われる。しゃれた



会して
代はをが
そるそさ
ろ間あら
を縁し聞

る。もと、ま折に景も

、内えて

共さ固有

、未知れて里が形作、も化をれた



会話をかわしながら、食事を楽しむ。そうした食事の文化を通して、人間性も培われてくる。

考えてみると、日本の給食は、昭和20年代の食糧不足の頃から脱皮していないのではないだろうか。あの当時では、まず飢えをしのぐのが、なにより大事であり、文化が二の次になるのもやむをえまい。しかし、それから、三十有余年を経て、子どもをめぐる環境は大きく変わった。そうだとすると、そうした状況にあった給食のあり方が検討されてよいのではないだろうか。

子どもたちに、ぜいたくな食事を用意しろというのではない。情操を豊かにし、人間性を育てる食事のあり方を考えたいのである。大きなバケツに入ったシチューをプラスチックのおわんに盛りつけるありさまを見ていると残念ながら、文化とはおよそ縁遠い、えさを配るというようなイメージしかわいてこない。本物のオーケストラを聞く。あるいは、本物の絵に接する。そう

した体験が情操を育てるのに役立つとするなら、本物の食事は、日常的な行為であるだけに、オーケストラ以上に子どもたちの心を育てる可能性が強い。

しかし、ここでは、問題の指摘を、この程度にとどめ、以下、実際に給食を食べている子どもたちの声を紹介することにした。



子どもと給食

提 言

ゆったりとした雰囲気のもとで、肩のこらない会話をかわしながら食事をとることが、精神を安定させ、人間性を豊かにするのは論を待たない。

そうした基準で給食を考えると、残念ながら、現実の姿は人間性をそこなうものといわざるを得ない。

① 少なくとも、できるだけ早い機会に、一部で実施されているように、教室以外に食事の場所として食堂を作る。それが無理なら、せめて、食器の類をもう少し、人間的なものへ変えていく必要があるだろう。

② また、学校によっては、選択の原理を導入して、お弁当を持ってきてもよいし、給食を食べてもよいというような制度も検討すべきであろう。

③ 上記の試みが無理な場合でも、給食の時間には、子どもたちの触れ合いを優先すべきだと思われる。他の子どもに迷惑をかけない限り、子どもたちの語らいを暖かく見守ってやりたい。一部で行われているような給食指導は、子どもたちの持っている数少ない触れ合いの機会を奪うことになりがちである。

④ 給食の時間ぐらい、担任は、教師らしさを忘れよう。ひとりの人間として、子どもに接してほしい。

⑤ 本来、「給食」という言葉そのものが望ましくない。「ランチ」や「食事の時間」という言葉を使ってもおかしくないぐらいのレベルを確保することが望まれてならない。

東大阪市立孔舎衛小学校教諭 東 訓 正
奈良教育大学教授 深 谷 昌 志

要 約

① 4割

- ① 給食の前に空腹な子どもは約4割(図4)
「とても空腹」といっている子どもは18%にすぎない。子どもたち全体の傾向として食欲のない子どもの増加が目につく。

② 約半数

- ② 給食はおいしいが約半数(図5)
子どもたちの中で、給食がおいしいと答えた者は「とても」の18%を含めて、「かなり」で44%、「やや」を入れると83%に達する。

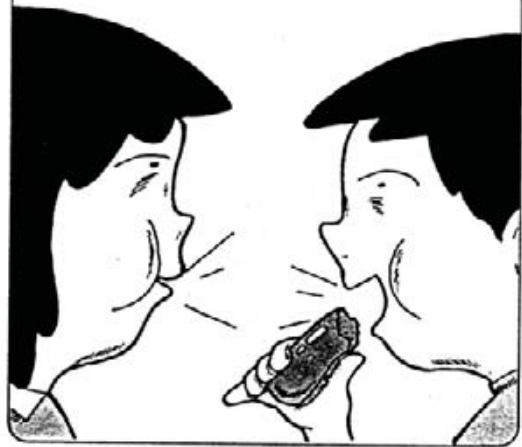
③ 1位フライドポテト

③ 1位はフライド・ポテト(表1)
子どもたちの好きな献立の1位はフライドポテト、以下、プリン、くだものと、スナックやデザート類が続く。



④ 93%

④ 好きな友だちと話しなが(図8)
せめて食事の時ぐらい、友だちと話し
ながら食べたいと思っている子どもが93
%に達する。



⑤ 丸つけ反対!

⑤ 給食の時間にテストの丸つけ反対
給食の時間、先生に、おもしろい話で
もして自分たちの中に入って来てほしい
と、子どもたちは思っている。



⑥ 空腹は子どもらしさ

⑥ 空腹は子どもらしさ(図16)
子どもたちの中で、空腹を感じている
子どもは、やる気があり、頑張りやで、勉
強も得意である。



1. 子どもたちは給食をどう評価しているか



「
に
手
の
つ
し
た
実
際
量
に
多
も、
割
込
し
た
ば
は
は
し

調査は、巻末に掲げたような質問紙を用いて行われた。サンプル数は、巻末の資料2に掲げたように大阪、奈良と東京の小学4年生

から6年生まで計2,179名で、すべて学校経由で調査を実施した。調査時期は昭和56年11月である。

食欲のない子どもたち

まず初めに、子どもたちの持つ食欲について探ってみよう。

学校の中で子どもたちの様子を見てるとどこか意欲に欠けたような子どもたちが目についてならない。休み時間でも、元気に遊んでいるものの、その後姿に何か気だるさのようなものさえ漂わせている子どもたちが増加している。

学習に意欲を持たない子どもたちが多くなったという声を耳にすることも多いが、それが子どもたちの生活全体に浸透してきたよう

に思えてならない。

そして、その典型的な例を子どもたちの食欲に見る思いがする。

さて、図1に示したのは、子どもたちの食欲についての集計結果だが、子どもたちの中で「食欲がある」と積極的に認めているのは4割にも満たず、半数以上の子どもたちが、「ややある」か「食欲がない」と消極的な回答を示している。これを学年別に見ても、学年による開きが少なく、食欲を持った子どもの占める割合は、4割前後にとどまっている。

口いっぱい食物をほおばり、何でも旺盛に食べる。小学生という、そうした子どもの姿がうかんでくるが、それにしては、ちょっとさびしい気持ちのするデータである。

だが、「食欲」といった抽象的表現ではなく、実際の食事場面にあてはめて、食べる回数や量について、朝食を例にとって考えてみよう。

食欲が旺盛であると言いがたい子どもたちも、朝食になると、図2に掲げたように、8割近くが毎日食べており、さらに、図3に示した食べる量の結果をみても、7割近くがほぼ満腹状態まで食べているという。

しかし、いくら子どもだからといっても、

眠りから覚めた後の食欲がこれ程あるとは思えない。「食べなければいけない」という義務感や親からの強い指導により仕方なく食べているのではないだろうか。図4に掲げた、起床時の空腹感をたずねた結果をみると、約2割強しか「お腹がすいている」とは思っておらず、彼らが朝食を食べることを余儀なくされている姿がうかんでくる。

そして、1日の生活の中で最も空腹感を覚えるのは夕食前と、給食前と、さすがに夕食前は、空腹を感じている子どもが「かなり」を含めて、6割を超える(図4)。

図1・食欲の有無

(%)

	とてもある	かなりある	ややある	やや・かなり・ぜんぜんない
全体	19.8	19.2	37.2	23.8
男子	25.8	21.7	31.4	21.6
女子	13.8	16.4	43.6	26.2
4年	19.6	20.8	35.4	24.2
5年	19.5	18.6	37.4	24.5
6年	20.1	18.0	39.0	22.6

校経
年11

の食
の食
の中
のは
が、
回答
学年
もの
る。

図2・朝食を食べているか

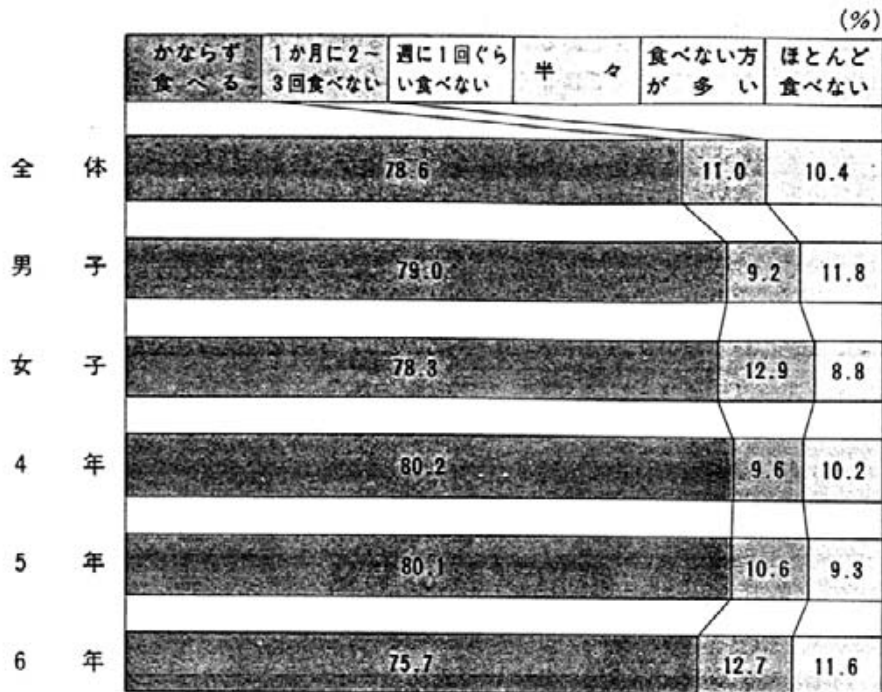
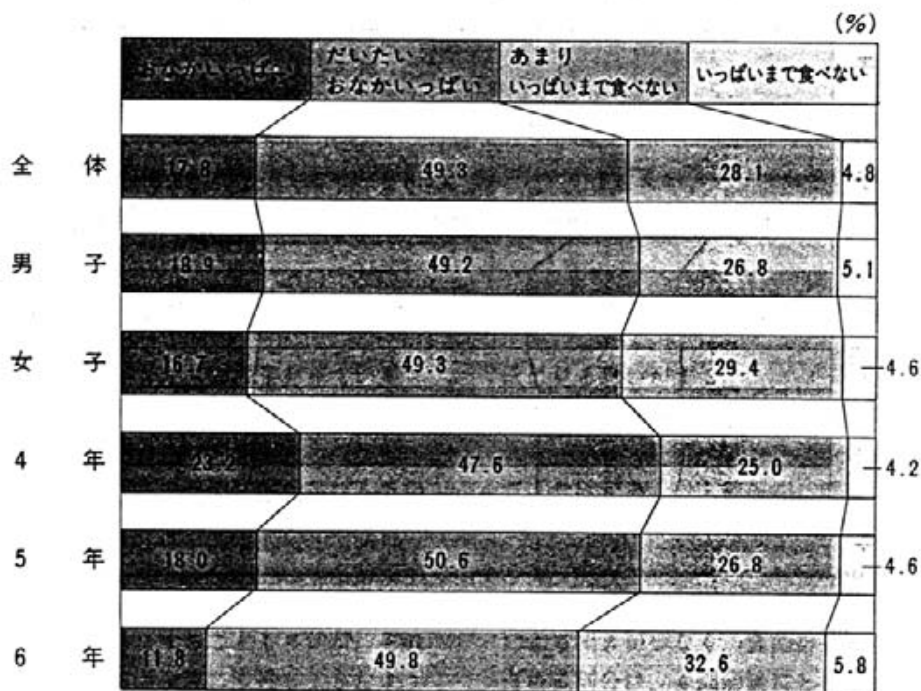
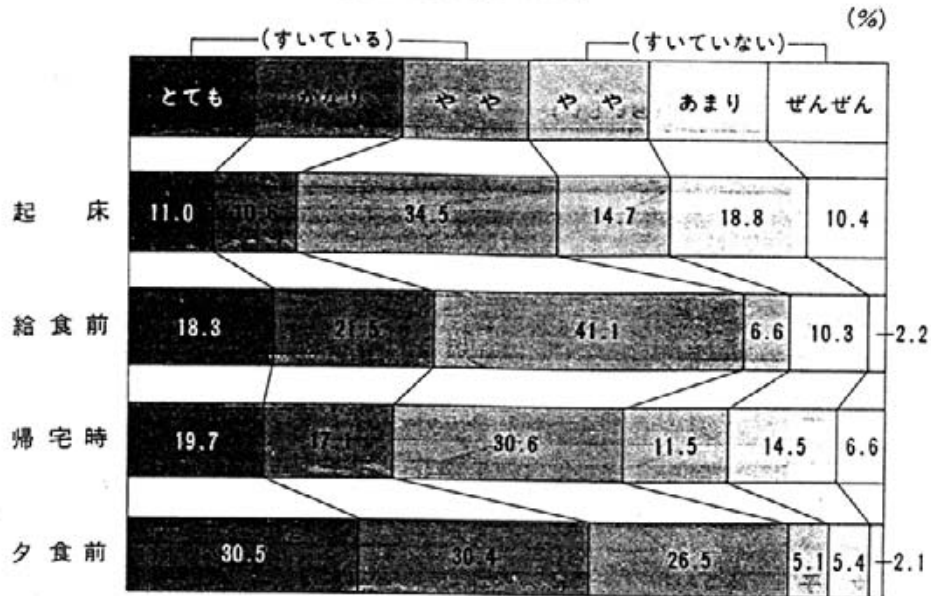


図3・朝ごはんを食べている程度



朝食の開始は乳児期から。乳児期に乳を飲ませることで、乳児の消化器が鍛えられ、乳児の消化器が鍛えられる。乳児の消化器が鍛えられる。乳児の消化器が鍛えられる。

図4・空腹度



給食はおいしいか

第二次世界大戦後に限っても、学校給食が始まってから現在までに、脱脂粉乳から市販牛乳へ、コッペパン1種類からバターパンやうずまきパンなどへいろいろな面で改良の手が加えられてきている。今では学校給食研究指定校が存在しているほど、全国的にみても、意欲的に給食にとりくんでいる学校が少なくない。

給食の献立内容については、あらためて触れるまでもないが、大きく分けてパン、牛乳、おかずからなり、さらにおかずは、主食的なものとつけ合わせ的なものとに分かれている。

その中でも、子どもたちが最も関心を持つものはおかずの内容であろう。彼らは、給食が教室に運ばれてくると、だれもがまずおか

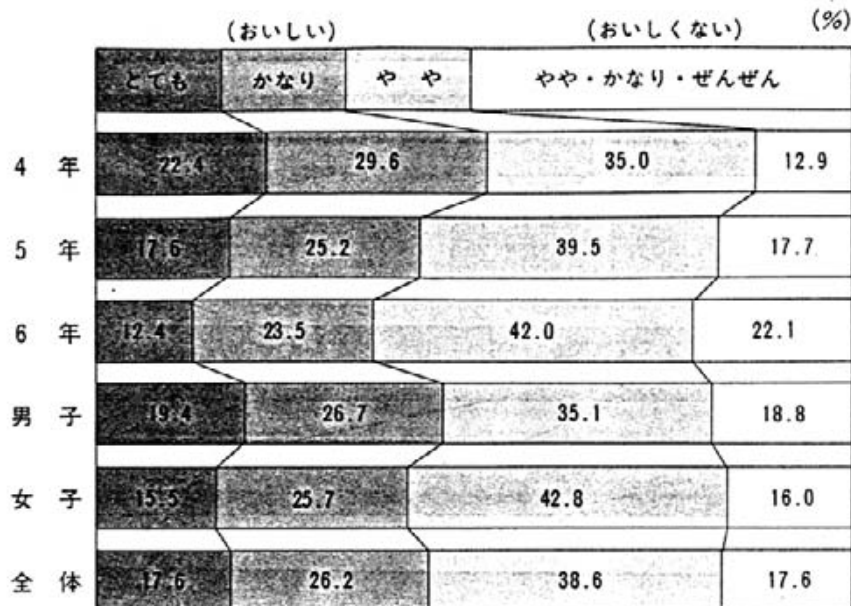
ずの食缶のふたをあげ、その内容とそこから漂ってくる香りに一喜一憂する。

彼らにとって、おかずが好みのものか否かは、その日の給食の食べる量はもとより、気分的な楽しさにまで影響を与える一大事のように見える。

そこで、図5に給食の味についてたずねた結果を掲げてみた。高学年になるにしたがって味の評価は下がっていくものの、8割近くが「まあおいしい」と思っている数値が得られている。つまり、少なくとも子どもたちは、給食はまずくない、そこそこの味つけがなされていると感じているらしい。

それでは、給食の量についてはどうか。子どもたちと同じ献立の食事をしている教師の

図5・給食の味



立場からすると、変わりばえのしない味つけに、たまには、ラーメンか、そばでも食べたいと思うことが多いが、それと同時に、量の面でも、なんとなくもの足りない気持ちが残る。

しかし、子どもたちにとっては、図6のように、多くもなく少なくもなくといった感じで、7~8割の子どもが、量的には適当と答えている。

これを、給食の種類別で見ると、図7のように、牛乳はほぼ全部飲んでしまうが、パンについては10人中3人が多かれ少なかれ残しており、おかずについては10人中1~2人が残している。

パンの場合、残っても手軽にビニール袋に入れ、ランドセルの片すみに入れられるので、残す子どもが多くなるのであろう。

また、おかずについては、残れば食缶に戻すこともできるが、先程述べたように全体として味がよくなると同時に、かなり食べ易く調理されていること、さらに子どもたちの食欲に応じた量の配分をしているクラスが多

くなったなどの事情が加わって、残す割合が低いと考えられる。

それでは、子どもたちの好きなおかずがどんなものなのか、表1と表2に目をとめてほしい。

子どもたちが最も好きなおかずは「フライドポテト」で、以下プリンとくだものが上位3つを占めている。これら3献立は、おかずというよりつけ合わせ、あるいはスナック的な色彩が強い。また子どもたちが日常、口にする市販のものと同じくらいいい程、質的に変わらないものでもある。

調査票を作った段階では、カレーシチューやうどんといった献立が、圧倒的人気を集めるのではと予想していた。しかし、表中の数値を見ると、子どもたちは量的に多くはなく、家庭での食物と比べて異物感を持たないですむ軽いものを好む傾向を示している。つまり、子どもたちにとって、給食が空腹を満たすという意味と同時に、おやつ的な捉え方をするようになってきていることを意味するように考えられる。

図6・給食の量

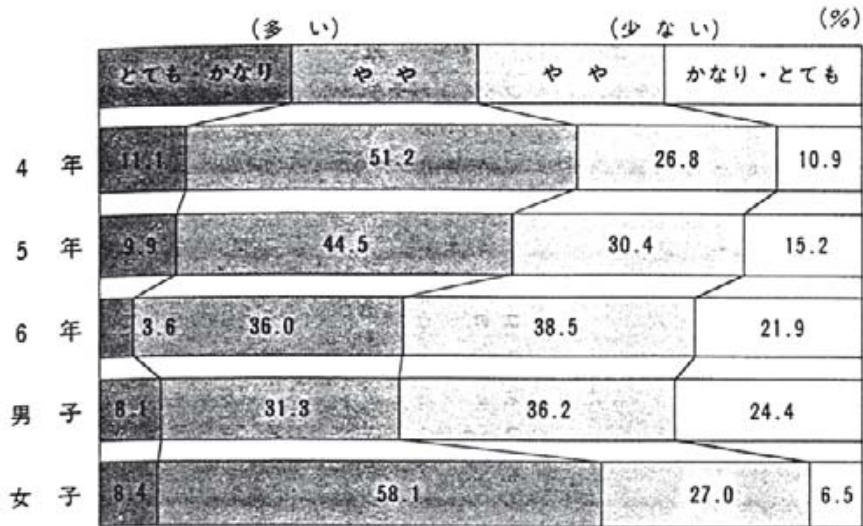
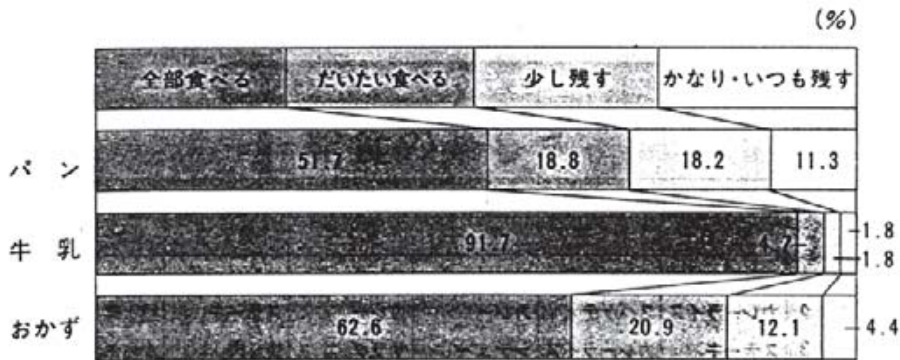


図7・給食を食べる量



合が
がど
ては
ライ
上位
か
ず的
にす
的に
ユー
集め
の数
なく
です
まり
す
をす
よう

1.子どもたちは給食をどう評価しているか

	4 年	5 年	6 年
1 位	フライドポテト	フライドポテト	フライドポテト
2 位	ブリン	ブリン	くだもの
3 位	くだもの	くだもの	ブリン
4 位	やきそば	ハンバーグ	ポタージュスープ
5 位	コロッケ	やきそば	コロッケ
6 位	ポタージュスープ	ポタージュスープ	ハンバーグ
7 位	ハンバーグ	コロッケ	やきそば
8 位	ウインナーソーセージ	ウインナーソーセージ	すきやき
9 位	フルーツみつめ	すきやき	スパゲティ
10 位	すきやき	スパゲティ	みそ汁

表2・好きなもの・きらいなもの

		4 年		5 年		6 年	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子
好きなもの	1	ハンバーグ	ハンバーグ	ハンバーグ	ハンバーグ	ハンバーグ	ハンバーグ
	2	カレーライス	スパゲティ	カレー	カレー	ステーキ	焼肉
	3	ステーキ	カレーライス	シチュー	サラダ	焼肉	からあげ
	4	スパゲティ	ステーキ	サラダ	スパゲティ	カレー	サラダ
きらいなもの	1	ピーマン	ピーマン	トマト	トマト	八宝菜	ピーマン
	2	トマト	トマト	ピーマン	チーズ	ピーマン	八宝菜
	3	野菜	チーズ	魚	ピーマン	サラダ	魚
	4	八宝菜	魚	チーズ	八宝菜	トマト	サラダ

2. 給食の雰囲気



給食の楽しさ

給食に限らず、食事は、空腹を満たすという生理的な意味の他に、ともに食事をとるといふ社会的な性格をも備えた営みである。そこで、以下、給食を食べる雰囲気を考えてみよう。

肩をはって食べるより、リラックスした雰囲気の中で食事をすれば、食も進み、楽しさも増すであろうことはいうまでもあるまい。そうした状況は、給食についてもあてはまる。それでは、給食の時間は、子どもたちにとって楽しい時間なのであろうか。

図8に掲げたのは、どんなすわり方をしたいかをたずねた結果である。なによりも人気があるのは、「好きな友だちといっしょに座って食べる」である。毎日、同じ教室で生活しているクラスメートの中でも、好きな、気

の合う仲間が生まれてくる。そうした友だちといっしょなら、自然と話はずみ、気分的にも浮かれてきて、楽しい食事ができる。

その他の形、たとえば多くのクラスでとられている班別方法でも、全員が輪になる形でもかまわない。ただ、授業の時と同じように、「みんなが黒板に向かう形」は敬遠したいというのが子どもたちの心の内のように思われる。食事なのだから、くつろいだ気分で食べたいという子どもたちの気持ちは理解できる。

しかし、そうした子どもたちの気持ちとは別に、クラス全体として「給食中のルール」のようなものが存在することが多い。図9に掲げたのはそのほんの一例にすぎないが、「給食をぜんぶ食べる」については、現実の姿とほぼ同じ割合の73%の子どもが肯定している。

図8・給食の時の座り方

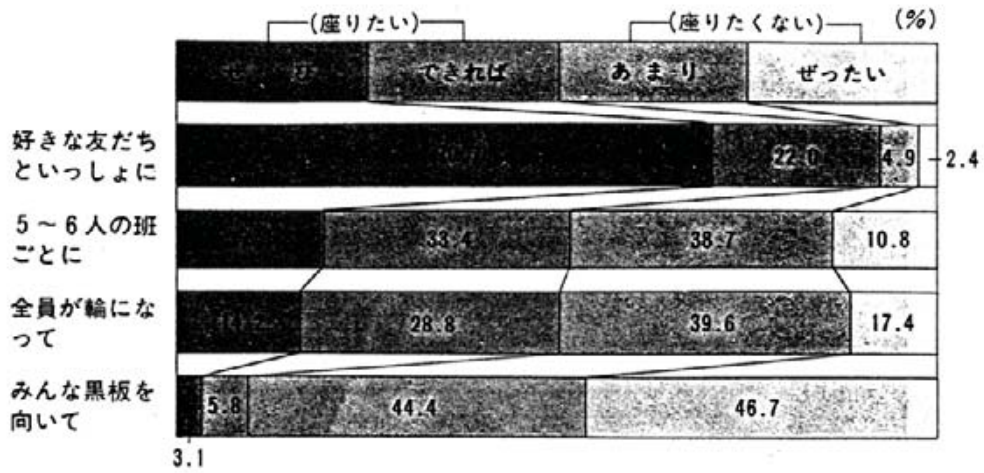
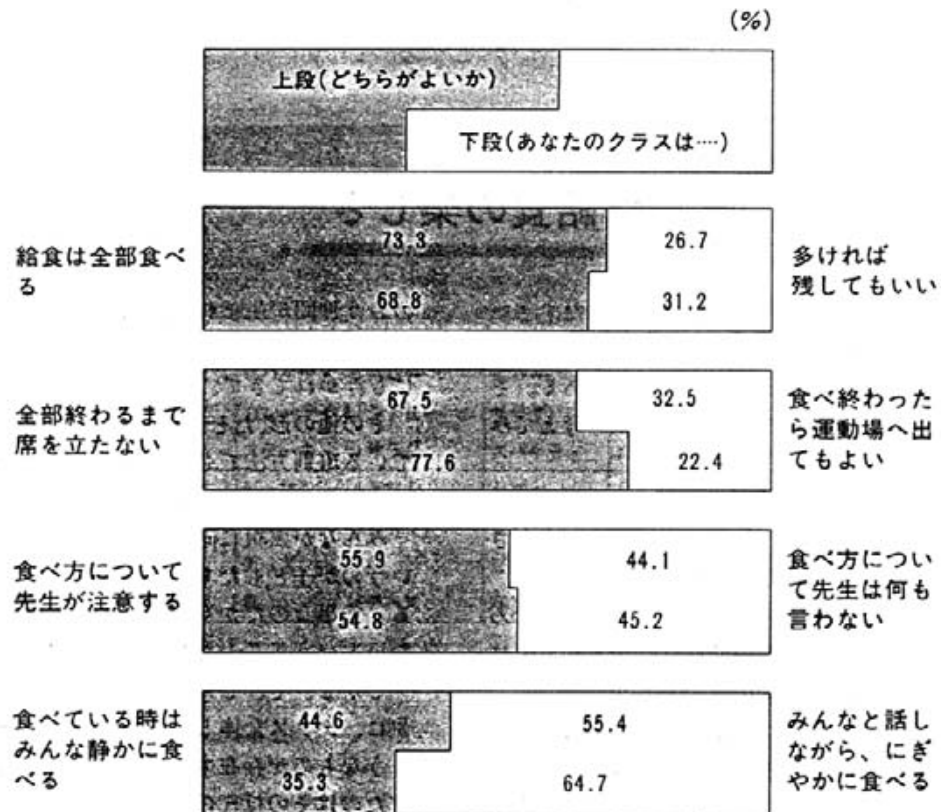


図9・給食中のルール

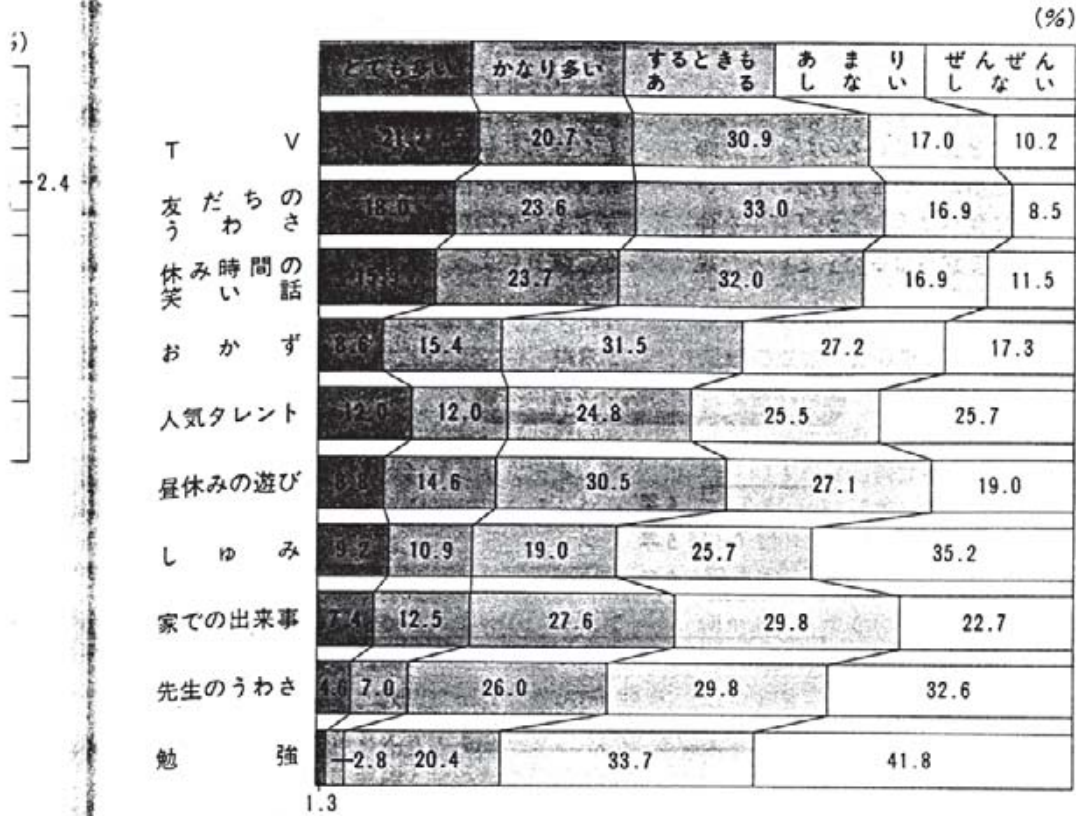


*図中の数字は「ぜひ」と「できたら」をあわせたもの

↑
あま-り
好き
ま
人
屋
し
多
分
免

ま
べ
実
も
い
き
た
後、
に
数
り
は
し
の
っ
っ
10

図10・給食中の話題



また、「食べている時はみんなと話しながら食べたい」と55%の子どもたちが望んでいるが、実際は、それを10%ほど上回る65%の子どもが、「にぎやかに話しながら、食事をしている」という。

給食の時間ぐらい友だちと思う存分話をしたいというのであろう、考えてみると、放課後、友だちとの触れ合いの少ない子どもたちにとって、給食の時間は、毎日の生活の中で数少ない貴重な雑談の時間となる。給食のあり方として、そうした形が望ましいかどうかはともあれ、子どもたちから触れ合いの場としての機能を託されているのが、給食の現実の姿と言わざるをえない。

それでは、毎日あきもせずにはしゃべりまくっている子どもたちは、どんなテーマをめぐって、会話をかわしているのだろうか。図10に、子どもたちが話しそうなトピックスを

選んで、会話の有無をたずねたが、子どもたちは案外、このような話題は話していないように見える。よく話しているTVの話題でも42%にとどまり、子どもたちが最も興味があるだろうと思われた人気タレントのうわさでも25%以下にとどまっている。

子どもたちの会話には話題はなく、あったにしても、その場で思いついた笑い話や友だちの表情や話す内容をちやかすといった、いわば世間話的なものが多いのであろう。

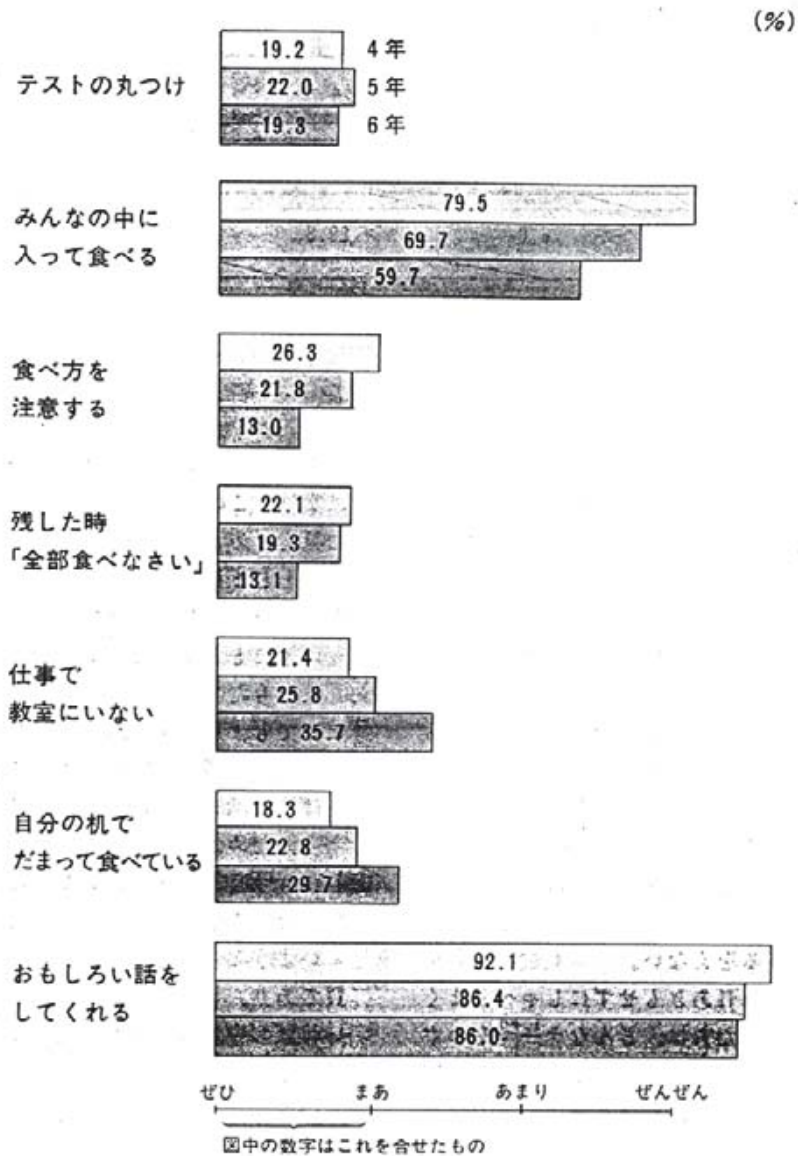
そのため、どんな話をしていたの、と聞かれても「別に」などのあいまいな返事しか返ってこないことになる。しかし、記憶にも残りにくいようなその場限りの話こそが、雑談の本質であり、われわれおとなたちの肩のこらない雑談の中にも、そうした性格を見い出すことができる。

教師の役割

教師たちは、このような雰囲気の教室で、子どもたちと給食を食べているのだが、教師には指導という仕事がついてまわるのでつい「残さないように食べよう」とか「背中を伸ばして正しい姿勢で食べなさい」といった説

教的なことを言いがちになる。しかし、そうした指導に積極的にならず、その他の形で、給食の時間を活用したいと考えている教師は、子どもたちの班に入っていっしょに食べるとか、曜日によって入れてもらう班を変えて、

図11・教師への役割期待



子どもたちにとけこむ形をとる。

また、全員に物語を読んで聞かせていたり冗談ととれる笑い話を積極的に投げかけている教師も少なくない。

そして、当の子どもたちの意見をたずねてみると、図11が示すように、「おもしろい話をして、子どもの中に入ってくれる」姿を、教師に期待している。

たしかに、雑務に追われるあまり、給食もそこそこに、残った時間をテストの採点や日記帳に目を通すなどにあてねばならない場合もある。しかし教師は、授業の時、権威を持って、子どもたちと接しているだけに、せめて昼休みや給食の時間ぐらひは、教師らしさを忘れる必要がある。子どもたちも、給食の時に採点をするような担任は敬遠したいと答えているからである。

しかし、教師と共にという気持ちは学年が進むにつれ、その影をひそめていく。そして教師と共に班の中で食べることをあまり好まなくなるだけでなく、教室にいない方がむしろよいといった感情さえ芽生え始めてくる。

高学年になると、教師といっしょに食べる

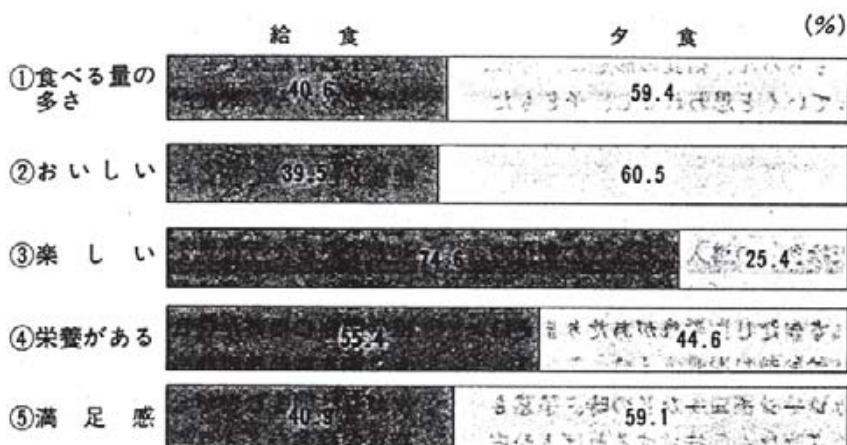
よりも、仲間たちとしゃべっている方が楽しいという気持ちが育ってくるのであろう。

ここで、今まで述べてきた子どもたちにとっての給食の意味を、もう少し広い意味で捉えるために、給食と夕食との比較を試みると、図12の通りとなる。

家庭で作られる夕食はコスト的にもかなり高いものであるし、調理の仕方や献立の種類などにも工夫が凝らされている。さらに子どもたちの好む味つきがなされていることを考慮すると、給食に比べて、おいしさや量、満足感の点で夕食の方が優っていても当然と考えられる。しかし、おいしさや満足感でも、夕食に軍配をあげた子どもは6割にすぎず、残りの4割は、給食の方がよいと答えている。そして、特に「楽しさ」では、半の子どもが、「給食の方」と反応しているのが注目をひく。

いくら家族とはいえ、年の離れた兄弟や、何かあるとすぐに叱る親と食事をするより、共通意識の持てるクラスメートとの食事の方がより楽しくなるのは、わかるような気持ちのする結果である。

図12・給食と夕食



、そう
形で、
教師は
べると
えて、